



日本記者クラブ 記者会見

カンボジア和平と日本の創造型外交

今川 幸雄
前駐カンボジア大使

1996 年 2 月 27 日

新生カンボジアの初代大使を務め、1996 年 1 月に帰国した今川大使はこの和平プロセスの中で日本の果たした役割を、戦後初の積極的で創造型的外交だったと評価する。パリで開かれたカンボジア和平国際会議から 7 年、この問題に継続してかかわってきた経験を踏まえ、現在の政治状況を分析し、ポスト・シアヌークの見通しやクメール・ルージュなどについても語った。

本日は、日本がカンボジア和平およびカンボジアの復興に果たした役割と、その経験が日本の外交にどのような影響を与えたかということとをまずお話した後、カンボジアの現状をどう見て、将来をどう判断するかということについて、私なりの意見を述べさせていただきたいと思います。

まず、日本が果たした役割です。ご承知のとおり、日本は第二次大戦で敗戦して以来、アジア外交に対しては非常に臆病であり、日本はアジア情勢の動きに対応する対応型的外交だけをやってきたと思います。それはもちろん結構なのですが、積極的に出て行くのではなく、あくまで受け身であり、うまく対応することによって国益を守る、ということが40数年続いてきたと思うのです。

その中で、私は、カンボジア問題に関する日本の外交は、第二次大戦が終わって以来、初めて積極的に平和と安定の創造のため関与するという、創造型的外交だったと思っています。

和平の萌芽を全力でフォロー

1987年12月、フランスのエフェール・アン・タルドゥヌアという小さな町で、当時大変争っていた反ベトナム三派側の代表シアヌーク殿下と、ベトナムに支援されてクメール・ルージュを追い払ったヘン・サムリン政権のフン・セン首相（現第二首相）の二人の間で、もういいかげん平和の話し合いをしようということで、話し合いの端緒が開かれました。

その時、日本だけではなく世界が驚いたわけです。つい先日まで戦い合い、殺し合っていた両派が、しかもその時点においてさえも相互に誹謗、中傷し合っていたにもかかわらず、トップレベルで話し合いをする、ということになったのですから。これには非常に驚かされました。

私は当時マルセイユにいましたが、外務省から命令を受け、マルセイユとは関係のない中

国、ベトナム、タイ、インドネシアを回ってカンボジア自身には行かれなかったのですが「カンボジア情勢がどのように動いているか、情報を探してこい」と命じられて行ったこともあり、フランスにおきましてカンボジア和平が最初の芽を出してから、日本は在フランス大使館の大使以下参事官や書記官等を動員して、全力を挙げて、これに関する情報収集を行ったわけです。

そういうことで、アジアにおける紛争の処理、戦争と平和の問題について、日本がどこかで働く余地がないかと真剣に考えた。これは第二次大戦後の日本にとって初めてのことでした。

その時、私はよく外務省の幹部と「日本が何かやる以上、カンボジアの民族主義を尊重しよう」という話をしました。民族主義というと、なにか安っぽい陳腐なイデオロギーのような感じを受けますが、そういうことではなく、カンボジア固有の文化、歴史、宗教、それから国民感情を十分尊重した上で、日本にできることを探そうということです。つまり大国の介入のような形ではなく、あくまでカンボジアを側面から助ける、カンボジア和平を自分たちでやろうとした、シアヌークとフン・センを助けよう、という方針をとったわけです。

パリ会議で果たした日本の役割

ところで、今までアジアの平和問題については、残念ながら日本には呼びかけがなかった経緯があります。1954年の第一次インドシナ紛争を収めるためのジュネーブ会議、あるいは62年のラオス紛争解決のためのジュネーブ会議、73年のベトナム紛争終結のためのパリ会議。こういうものには、日本は一切入れてもらえなかった。

しかしながら、1989年8月、正確には7月30日から9月1日までですが、パリで開かれた、カンボジアの四派を入れての18カ国の

会議に、日本は初めて正式に参加を呼びかけられました。しかも単に参加を求められただけではなく、第一＝軍事、第二＝政治、第三＝復旧・復興と難民の帰還を扱った各委員会のうち、第三委員会の共同議長国になりました。

私はこの第三委員会で、豪州のメリーリーズ次官補、今はスウェーデンの大使をやっておりますが、このオーストラリア人と一緒に共同議長をやりました。第一委員会と第二委員会は盛んに喧嘩をするだけで、何ひとつ結論を得られなかったのに対して、第三委員は復旧・復興の問題と難民帰還の問題について、クメール・ルージュを含むカンボジア四派、および18ヵ国全員の合意を取り付けることに成功しました。これは非常に大変だったのですが、カンボジアに言いたいことは言わせ、カンボジア側を立てた結果だと思えます。この第三委員会での合意が、2年後にパリ協定の一部になるわけです。そういうことで、パリ会議において日本は非常にいい働きをしたと私は思っております。

第一委員会（軍事）、第二委員会（政治）という二つの分野が成功しなかったものですから、パリ和平会議は中断されました。その後タイのバンコク、パタヤ、ジャカルタやニューヨーク、パリなどで話し合いが行われましたが、その比較的早い時期の一九九〇年五月に、いわゆる東京会議が開かれました。

この会議では、少なくとも二つの点で成果があったわけです。一つは「今後とも話し合いを続け、カンボジア和平のため最大の努力をする」という文章にシアヌークとフン・センがそれぞれの主張するタイトル付きで署名をし、彼らの間でも文書を交換したことです。日本政府がそのオリジナルを持っていると思えます。これは全く初めての出来事であり、エフェール・アン・タルドゥヌアとかジャカルタとか、そういうところでは一切できなかったのが、日本で実現したわけです。

第二の点は和平の中心になる最高国民評議会（SNC）の構成に関するものです。それまではプノンペン側が4分の1、ソン・サン派が4分の1、シアヌーク派が4分の1、クメール・ルージュが4分の1ということで協議をしてきたわけです。しかし、それではあまりにも現実的ではないので、思い切って日本はプノンペン側が2分の1、反ベトナム抵抗政府側つまりシアヌーク派、ソン・サン派、クメール・ルージュが2分の1、したがってこの三派はそれぞれ6分の1ずつ、という提案をしました。もちろんシアヌーク殿下とは、内々提案する前から相談はしました。

喧々譁々の議論がありましたが、それで良いというシアヌーク殿下の決断によって決まりました。これはその約3ヵ月後にジャカルタで行われた、国連の5常任理事国を含めた会議で正式に決まるわけですが、東京会議で既にこの合意がなされました。そういう意味で、東京会議は日本の外交にとって大変な成功であり、創造的外交の一環をなすものだったと思っております。

直談判で拡大P5会議を設置

結局1991年10月23日、カンボジアの和平に関するパリ協定に署名が行われ、それと同時に先ほど申しました構成で、国民最高評議会（SNC）が発足したわけです。

そうした中で、私は11月10日にカンボジアに赴任いたしました。その段階では、現に存在するフン・セン首相が率いるヘン・サムリン政権を日本は承認していませんでした。未承認国に名称だけでも大使を送るというのは、旧来の国際法では若干問題があったわけですが、あくまで国民最高評議会に対する日本政府の代表、という形で派遣されました。シアヌーク国王は、私が赴任してから4日後に20数年ぶりに祖国に帰って来られたわけです。

その約4日後の1992年3月15日に国連を代表して、パリ協定に基づき1年半にわたり暫定統治を行う国連カンボジア暫定統治機構(UNTAC)の明石代表が到着しました。たまたま彼は日本人だったのですが、そのことが日本の外交に非常に有益であったことは申すまでもないことです。

明石代表の到着と同時に、国民最高評議会(SNC)と国連暫定統治機構(UNTAC)との両方がそろうという形で、カンボジアの統治機構が、パリ協定にしたがってノーマルになりました。それまで私は国民最高評議会への日本政府代表という名目でしたが、その時点で特命全権大使に任命され、カンボジア国駐在となったのです。

二国間の外交をやるのが大使なのですが、私は主として明石さんを助け、UNTACを助ける、ということを経営されていました。ところが、国連がかなり関与して作った和平ですから、国連の5常任理事国ばかりが、言葉は悪いのですが「デカイ顔」をして、日本、豪州、タイなどがどうも重要視されないわけです。

私は非常に残念に思い、個別の訓令は受けてなかったのですが、「お前たち、何でも良いからオレと一緒に来てくれ」と言って、豪州とタイの大使を連れて、シアヌーク殿下が国民最高評議会議長として、各派の代表および5大国の代表と協議しているところに乗り込んで行きました。そこで「日本も豪州もタイも本当に一生懸命やったのだ。あなた方の国をこれから助けようというのに、我々を入れないで協議するのは腑に落ちない。一緒に入れてくれ」と言いましたら、シアヌーク殿下は、英語で言えばYou are welcome!と、独特のジェスチャーで大きく手をひろげるのです。ほかの5カ国の大使もいたのですが、その大使方がどう思ったかは知りませんが、「ぜひ来なさい。ぜひ来なければならない。日本は重要だ。豪州も重要

だ」というような言い方で入れてくれました。その結果、拡大P5、明石さんはEP5と言っていますが、Expanded P5という機構ができました。

プノンペンにいるEP5の8カ国とインドネシア(インドネシアはパリ会議の議長国です)の大使は、少なくとも一週間に二度、多いときは一日に3回も会い、クメール・ルージュをめぐる問題、またはベトナムをめぐる問題について協議を行いました。もちろん明石さんも毎回出てきましたので、UNTACを助けることもできました。こうして日本が和平の問題に関与することができたのは、日本にとって良かったことだと思っております。

ほぼ満点だった日本のPKO

そこへ日本のPKOへの派遣問題ができたわけです。アメリカからとか、国連からとか言われますが、本当に日本に参加を頼んできたのは、第一にカンボジアであり、直接当たってきたのはフン・センです。それから続いて「ぜひそうしてくれ」と言ったのはシアヌークです。つまり、カンボジアで争っていた両派の首脳が、日本にぜひ参加してほしいと言ってきたわけです。カンボジア流に言えば、外国の軍隊が国連軍の名において、これから暫定統治に一年半関与するのに日本が来てくれなければ困る、ということはかなり強く言ってきました。

社会党の反対もありましたし、難しいこともあったのですが、とにかく日本がPKOに参加したことは、その後の日本とカンボジアの関係にとって、どれだけプラスになったかわかりません。

と申しますのは、日本の自衛官も初めてのことでちょっと遠慮しておられたのかもしれませんが、とにかく来る前からカンボジア語の「こんにちは、おはよう」ぐらいはみんな勉強してきていましたし、大変礼儀正しかった。こ

ういう態度をカンボジア人は非常に喜びます。日本のほかにもインドネシアとマレーシアの両国は非常に態度が良く、カンボジア側から高く評価されました。

しかし、こういうことを言っただけではいけないのですが、一部の国、特に東欧のブルガリアとかアフリカのガーナなどは非常に評判が悪かった。今でもカンボジア人は彼らの傲慢な態度には正直言って恨みを持っています。自分の娘や女房にまで乱暴されたとか、いろいろな事件があったわけです。しかし日本に関する限り、そういうことは全くなく、本当に私はカンボジアとの関係で良かったと思います。

ただ、まことに残念なことに、選挙監視に従事されておられた中田さんの事件が起きました。これはクメール・ルージュではなかったと思いますが、カンボジアの地方のボスのような悪者に殺害されてしまった。それから、文民警察官の高田警視が亡くなったということは、日本のPKOを採点する場合、どうしてもマイナス点になるのです。しかし、この点を減点しても日本のPKOには90点の評価が与えられると思います。

PKO全体としては、私は70%程度の成功だったと思っています。カンボジアは国連のサクセス・ストーリーだと言われますし、その通りで大成功だったと思いますが、それでも70%程度だと思います。なぜかと言えば、クメール・ルージュに手をつけることが一切できなかったからです。クメール・ルージュはパリ協定にしたがって、どんなに遅くとも92年の6月13日までは自発的停戦から管理された停戦に入り、武装解除をして、動員解除の道に進まなければならなかったのですが、徹底的に抵抗してこれをしなかった。また最終的には総選挙に参加しなかった。これは非常に残念なことです。しかしこれは国連の問題であって、日本についていえば、私はほとんど完全に成功だ

ったと思っています。

復旧・復興援助こそが安定への道

その後、93年の5月に総選挙が行われました。思ったより平和に、クメール・ルージュの妨害もなく、しかも90%を超える高い投票率で行われました。これに参加しなかったのはクメール・ルージュにとっては非常にマイナスであり、大変な失敗でした。それはともかく、選挙の結果、制憲議会が成立し、制憲議会は立憲君主制を採用し、シアヌーク国王の再即位を求め、93年9月にシアヌーク国王が再即位しました。そして国連のPKOは一切終わるということになったわけです。そういう一連の過程を見ますと、カンボジアの紛争処理は、全体として成功であったと思っています。

日本は、特にシアヌーク国王とは常に良い関係を保ってきました。もちろんロン・ノル政権時代、日本も反シアヌーク的行動をとってしまったわけですが、それ以外はずっとシアヌーク国王とは、何らかの関係を持っていました。特にこの一連の和平が始まってからは良い関係にありました。これは大成功だったと思っています。

その後、日本は復旧・復興のためのICORC (International Committee for Reconstruction of Cambodia) という組織で、フランスと一緒に共同議長を務めました。その前にカンボジアの復旧・復興のための国際会議を92年に東京で開催するなど大変な貢献をいたしました。特に経済協力の中の無償援助の面で(94年に日本がカンボジアに与えた無償援助は140億円になります)インフラの整備などに対して日本は盛んに援助しております。

道路や橋の復旧が、カンボジアの経済および治安を良くすることにどれだけ貢献しているか。これはご覧になれば一番良くわかります。今まで崩れていた橋を直し、壊れてどうにもな

らなかった道路を直したことによって、新しいレストランやガソリンスタンドがたくさんできました。経済的な発展や雇用の促進にも大変役立っています。またその付近はUNTACの時代には、クメール・ルージュのゲリラが出てどうにもならなかった所ですが、今やここでゲリラなどといったらお笑いものだ、というぐらい平和を甦らせた。

私はあらゆる意味において、カンボジアに軍事援助を行うのは犯罪的だと思っています。一部の国が行っている軍事援助は、カンボジアに再び紛争をもたらす根元になると思います。そうではなくて、経済援助をやって国民の生活水準を良くすれば、クメール・ルージュが付け込む余地はなくなるわけです。自画自賛のようですが、日本政府はこの点では良い援助をしていると思っています。

カンボジアを支える三つの安定要因

次に最近のカンボジアの動きと、その中にある安定要因と不安定要因について、お話をさせていただきます。

第一はシアヌークの存在です。これは最大の安定要因です。カンボジアにおいて、国民のだから、クメール・ルージュを含めて、どんな政治傾向にある人からも尊敬されているのはシアヌーク国王ただ一人です。シアヌーク国王は憲法上「君臨すれども統治せず」の立場ですが、彼の与える精神的影響力は無視できません。これがあるからこそ、いまのカンボジアはうまくいっていると思います。仮に、シアヌークが将来没した場合、こういう安定のための精神的影響力を行使し得る人は、ほかに一人もいないと思います。したがって、彼の死後には非常な混乱が生ずるでしょう。

カンボジアの王位は万世一系の継承ではなく、王族の中から選ぶ選定君主制です。これは大変な問題を生ずる可能性があります。王位に

就く王族の後ろに政治家がからんで、政治的な闘争になる可能性がある。いずれにせよ、シアヌークは安定要因の第一です。

第二の安定要因は、旧シアヌーク派、現在第一党でありフンシンベック党と、一番力を持っているかつてのベトナム型人民民主正義政党の人民党との連立がうまくいっていることです。この連立はシアヌークの提案によるものです。選挙ではほんのわずかにフンシンベック票の方が多かった。そこで、もしフンシンベックが第一党であるということで、全大臣のポストをおさえて政権を握れば、地方組織も警察もおさえ実際には一番力を持っている人民党が反乱を起こすことは目に見えておりました。

シアヌークは「これはいかん」と思ったのでしょう。初めはしようがないから自分が首相になって、フン・センとラナリット 自分の息子でフンシンベック党の党首です を副総理にすると提案しました。しかし案の定、西側諸国から大変な反対がありました。そこで彼はイヤになってやめたのですが、しばらく経ってどうにもならないというのがわかって、共同首相制を採りました。93年9月に新しい政府ができ、自分が王位に就くと、シアヌークは第一党のフンシンベック党のラナリットを第一首相に、人民党のフン・センを第二首相にしました。ただし、第一も第二もプロトコール・オーダーだけの違いで、全く同じ権限を持っています。首相が二人いるというのは本来おかしいのですが、これがシアヌーク的な、私はあえて英知とりたいのですが、大変な知恵であり、これによって現在まで安定が続いています。

したがって、このバランスが崩れる時は単に政争が激しくなるのではなく、人民党がおさえられている軍隊が必ず動き出すと思います。そうすると、せっきくの今までのカンボジア和平が全部崩れる恐れがある。

第三の安定要因は、人民党のフン・センがし

っかり権力を握っているということです。これも最大の安定要因の一つです。人民党というのはもともと共産党だったわけですが、カンボジアの軍隊と警察と、地方組織を今でも實際上全部おさえています。これに対してラナリットのフンシンベック党は人もいないし力もない。

私は富士山の例え話をするのですが、カンボジアを富士山に例えると、富士山を作っている岩盤と土と砂は全部人民党です。その上にきれいにかぶさっている白い雪がフンシンベック党なのです。この雪はどんどん溶けるのですが、全部は溶けてしまわない。その程度の力です。

フン・センが力を持っているということが大切なのです。もともと人民党は前の共産党ですから、フン・センがしっかりしていなかったらベトナムの影響力が再び強くなるでしょうし、連立もだめになるでしょう。そして、見渡したところ、非常に頭が良く、人民党を立憲君主制の政体下における政党として維持していけるのはフン・センしかいません。フン・センが力を持っているというのは、大変な安定要因だと思います。これが崩れると大変なことになります。

無視できないクメール・ルージュ

最後にクメール・ルージュについてお話しします。彼らはタイとカンボジア国境に近い山岳地帯に、ある意味で閉じ込められているのです。かつては4万人と言っていましたけれども、今は戦闘要員が3000人、非戦闘要員が6000人から7000人、合わせて1万人程度しかいません。1000万の人口の中の1万人です。しかし、このクメール・ルージュを無視することは決してできない。と申しますのは、ベトナム戦争のころベトコンと呼ばれた南ベトナム解放戦線などに比べて、倍以上長く厳しいゲリラ闘争を経ていますから、あと5年でも10年でも彼らは待つことができる。

何を待つかと言えば、現政府の経済政策が失敗して、貧富の差が非常に激しくなり、大変な汚職、腐敗が行われ、一般国民の政府に対する怨嗟の声が強くなる。そのときを狙って、乾坤一擲の攻撃を加える。それまではじっと我慢している、と彼らは言っています。これは決して無視することはできません。

しかし、仮に外国からの軍事援助をもらった軍隊でやっつけようとしても、これは絶対にできません。力の面から言っても、長距離の補給ができないのが今のカンボジアの軍隊です。したがって、そんなことをせずに人民の生活を良くすることが大切です。20%でいいのです。30%なら大変なことです、それ自体はそんな難しいことではないと思います。外国の援助を国民の生活向上のためだけに使って生活を良くすれば、国民はバカではないのですから、決してクメール・ルージュ政権の下にまた行こう、などとは言いません。願わくばその方向に行ってもらいたい。

今のカンボジア情勢は、一部の方と見方が違うかもしれませんが、現地で見ると政治的にも経済的にも確実に良くなっています。したがって日本は、カンボジア人が本当に何を望んでいるのかを見て、カンボジアの民族主義、固有の文化、歴史、宗教といったものを尊重して、カンボジアを側面から助けるべきです。決してこうしろ、ああしろと圧力を加えない。そうすればカンボジアは安定していく。そうすることがアジアにおける日本の地位のために非常に良いのではないかと考えています。

質 疑 応 答

花井（中日 0B）私は93年の総選挙に選挙監視要員として参加しました。あの時は1000人以上の国際監視員が投票所や、開票所の監視をしました。98年にも次の総選挙があるらしい

のですが、その時には自分たちでできるのでしょうか？それともやはり監視員を頼まなければ公正な選挙はおぼつかないという状態でしょうか？

今川 98年の選挙については、フンシンベック党、人民党の両党とも非常に興味を持っています。そのために政治的な主張を双方が繰り返していますが、両方とも今度の選挙は自分たちカンボジア人でやりたいと言っています。カンボジアはかつてシアヌーク殿下の政権時代、つまりサンクム・リアストル・ニジヨムという政党の時代には、自分たちで選挙をしておりましたので、できないことはないと思います。

ただ、改めて選挙の登録を行い、投票場を設け、投票用紙を配るという資金がどこにあるかということ。また、中立公平な要員、あるいは各派の代表をどうやって集めるか、という技術的な面では、まだまだ難しい。

しかし、意地になっても今度は自分たちでやると思います。しかし、自分たちでやりますと、国際的に怪しいと言われる可能性があることも十分知っております。内々に私が話を聞きましたところ、国際的な監視要員を国連にお願いするか、あるいは自ら各国にお願いしてオープンな監視の下で選挙をやりたい、とのこと。おそらく、その方向に行くと思います。ただ何と言っても、選挙を行う技術的、物質的な面で、本当にどうやってやれるのか、ということが心配されます。なお人民党の人たちは、各村に三カ所ぐらい これはUNTACの選挙に比べるとだいぶ少ないですが 投票所を設ければできる、と言っています。

河村（朝日 0B）ベトナム戦争の末期、アメリカにはドミノ理論がありました。つまり、ベトナムが強くなり過ぎると、隣の国まで手を伸ばすというものです。案の定それをやったわけで

すが、その後ベトナムは撤退したことになっているのでしょうか？ベトナムあるいはラオスの勢力は、現在どういう形でどのくらいあるのですか？

今川 カンボジアで大きな問題になったベトナム軍の存在は、いわゆるアメリカの言ったドミノ理論によるベトナムの自然的影響力の拡大ではありません。つまり、アメリカのプレゼンスがなくなり、あるいは自由陣営側の力がなくなることによって、ベトナムの共産主義勢力が伸びるという図式とはちょっと違います。79年にカンボジア国内の農業がどうにもなくなるとき、クメール・ルージュは国内から国民の目をそらせようとして、南ベトナムに対する進攻を企てたわけです。

そういう挑発によってベトナムは、クメール・ルージュをそのままにしておくことは安全保障上危ない、ということで進攻したわけです。ベトナムから見ると、クメール・ルージュというのは大変に反ベトナム的な連中でしたが、進攻してみたら「強い、怖い」と言われていたクメール・ルージュが予想外に弱かった。数日にしてプノンペンを陥落し、さらに数週間で全カンボジア領土でベトナム軍がクメール・ルージュを追放してしまった。

それ以来、タイとの国境ですずっと頑張っていたクメール・ルージュが戻って来ないように抑えることは、カンボジアにとっても必要だったと思いますけれども、ベトナムにとっても絶対に必要であった。だからベトナムは10万人の軍をあそこに駐留させたわけです。

しかし、私もその前ベトナムにいましたが、ベトナムは戦争が終わった後も貧困の極にあり、軍隊を派遣すること自体が大変な負担だったわけです。そういうこともあり、カンボジアのヘン・サムリンの軍隊に徐々に肩代わりをさせ、ちょうどヨーロッパで東西の対立がなくな

り、ベルリンの壁が壊れた89年ころ撤兵を決定し、89年9月だったと思いますが、ベトナム軍はほとんど全員が撤退しました。そのとき本当に100%撤退したか、あるいは90%だったかは良く分かりません。しかし少なくとも、91年10月23日にパリ協定が署名され、11月14日にシアヌーク国王が帰って来た時点で、完全にベトナム軍は撤退しています。私は1991年の11月の時点では、もうベトナム軍はゼロになったと言えると思います。

ベトナム軍がいなくなったことが、どういう結果をもたらしたか？もしベトナム軍が全くいなくなってヘン・サムリン軍によって肩代わりされただけなら、おそらくクメール・ルージュはその力の真空を利用したかと思います。しかし、たまたまその時国連軍がやってきたわけです。これではパリ協定に参加したクメール・ルージュも手がつけられない。そういう意味でもベトナムは非常にうまく時期に撤退したと思います。

なお今日、不幸なことです、カンボジアとベトナムとは非常に仲が悪い。民族的な対立がある。なぜベトナム人をカンボジア人が嫌うか。これにはひとつ理由があるわけです。

ベトナム人もカンボジア人も旧仏領インドシナにおいて、フランスの支配下にあったわけですが、フランスは非常に巧妙でした。ベトナムは直轄植民地ですからきちっと治めましたが、カンボジアは被保護国であり、おそらく1000何百人ぐらいのフランス人しかいませんでした。彼らはゴム園を經營したり王族や華僑の大金持ちと付き合う「雲の上の存在」でした。実際に人民を支配する警察官吏とか徴税吏などには全部ベトナム人を利用したわけです。

したがって、フランスから80何年植民支配にあっているのですが、フランスを恨む気持ちというのはカンボジアの庶民の間にはないのです。むしろフランスの植民地時代に、虎の威

を借るキツネとして威張ったベトナムが憎らしい、というのがカンボジアの反ベトナム感情の元になっている。この感情は残念ながら、まだしばらく抜けないのではないかと。

ただ、昨年末にシアヌーク国王自身がベトナムを訪問しました。ベトナムの書記長もカンボジアへ来ました。そういうトップの交流などから、あと30年かかる50年かかるか分かりませんが、徐々にこういう国民感情は改善されていくのではないかとと思っています。

水野(朝日)シアヌークさんは健康状態が万全ではなく、今も北京で療養されているようですが、シアヌークさんが亡くなった後のポスト・シアヌークについてうかがいます。今川さんは高く評価されておられるのですが、フン・センは独裁者的傾向があるとも伝えられています。ラナリット第一首相の政治家としての力量を含めて、ポスト・シアヌークのシナリオをお話ください。

今川 率直なことを申しましょう。シアヌーク国王は、最近健康状態が良くなりました。私と一時間話をしていれば、私はせいぜい5分、あとの55分は彼一人でしゃべりまくっています。しかし、昨年は本当に彼の健康を心配していました。ただ「ガンだ、ガンだ」と言うのですが、シアヌーク国王がガンであると言った人は、彼自身しかいないわけです。お医者さんや中国当局はかつて誰も言わなかった。しかしシアヌーク国王は、盛んに自分の病気をみんなに告知してしまして、「前立腺のガンが悪化し、背骨の骨髓に入った。だからこれはもうダメなんだ」と言ったのは、ご本人なのです。

ところが昨年の中ごろになると、シアヌークさんは「ガンは完全に治った」と言いだしました。これは大変おめでたいことですが、中国の医者すばらしい技術と、西洋と中国の両方の

医学と薬を使ったから、もうガンは治った。ところが今度は糖尿病がひどくなった。目が白内障になった。左の目はこの前手術してすっかり見えるようになった。今度は右目を手術しに行く、というので今は北京に行っておられる、と思うのです。

そういうことで、まだそう簡単に死なないのではないか、と私は見えています。ただ、亡くなると確かに大変なことになる。それではその後はどうなるかと言いますと、四代前のアンドゥウォン王という王様の子孫にシソワット家とノロドム家という二つの王族があり、ともに平等に国王に選ばれる立場にあります。国王を決めるのはローマ法王の選定に似ています。首相、国会議長、国会副議長、仏教の二つの派の管長、という人たちによる王冠会議が、前の国王が亡くなってから7日以内に次の国王を決める、というのが憲法上の規定です。

ポスト・シアヌークの第一候補であるラナリット第一首相は、確かにある意味において国王になりたいと思います。ですから帝王学をやってくると良いのですが、どうもそうではない。ただ、彼は政治経験はそう長くないとはいえ、政治が好きで好きで仕方がなくなっている。あまりにも政治に関心が強過ぎるために、国王になって「君臨すれども統治せず」の立場になることをいやがるのではないかと思います。

第二の候補はシアヌーク国王の妃、モンニアク王妃の子供であるシハモニです。この人は男ですがバレリーナであり、奥さんはいませんけれども、選定君主制の国王には別に奥さんがいなくてもいいのかもしれません。現在、フランスで駐ユネスコ大使をやっています。文化面では確かに大変造詣の深い人です。ただ、この人の欠点はラナリットと正反対で、あまりにも国王になるには政治に関心がなさ過ぎる。

両名とも自ら「俺が」というようなことはあまりないのではないかと。後ろからいろんな政治

家がサポートして、こっちがいい、あっちは悪い、とやるでしょう。例えばフン・センは仲が良いラナリットを支持するでしょう。他方、人民党のプロトコール・オーダー一番のチア・シム国会議長 彼は国王と非常に親しいし、王様の奥さんともいい関係にありますから シハモニを支持するのではないかと思います。

二人を国王にするわけにはいかない。いくら首相が二人いても、どちらかということになると、大変な争いになる。つまり、王様にならなかった方の後ろにくっついている政治家が不穏な動きをすることになると思います。それを私は、非常に心配しています。

いずれにせよ、大変な力量のある、しかも国民から愛されているシアヌーク国王が亡くなれば、後継者問題を別にしても、政治的な混乱は免れないと思います。どうしたら混乱を起こらないようにし得るかという、やはり国民生活がもっと向上するように政府自体がしっかりすることだと思います。

なお、フン・センの力が強すぎるという話は外務省内でも言われていますが、私は全然そうは思わないのです。フン・センは、例えば小和田国連大使なども「カンボジアはフン・センだ」と言っているように、会ってよく話してみると、あれほど真面目で頭の良い人間はカンボジアにいない、と私も思います。しかし決して権力亡者ではない。さらに、彼は人望があります。

私はシアヌーク国王を尊敬しているし、シアヌーク派も好きなのですが、旧シアヌーク派にはフランス国籍やら、外国の国籍が多すぎて、カンボジアの国籍だけの人間はごく少ない。それに比べて人民党は、チア・シムやフン・センなど、ほとんど全員カンボジア国籍です。これは、私は民族主義の点で大いに尊敬しております。

ただラナリットとフン・センとの関係を、ぜひお間違いのないように。これは、本当にちょ

っと仲が良すぎて気持ち悪いくらいです。これは決して表面だけではなく、本当に助け合っています。シアヌークもフン・センを信用しています。

永井（読売） クメール・ルージュの資金源は、北西部の宝石だとか、木材だとか言われたのですが、現在でもそうなのか？あるいは、いまはそうではないとしたら、1万人の要員の資金源になっているのは何なのか？

今川 クメール・ルージュの資金源は、かつては中国からの援助と、タイを通じて行われる中国からの武器援助だったわけです。

パリ協定が成立して、カンボジアの戦争が終わった段階で、クメール・ルージュは実に大量の武器を持っていました。13年間にわたり中国から援助された大量の武器を持っていました。それを山の中に隠し持っていて、ほとんど使わなかった。

もし、パリ協定通りに武装解除したら、みんな取り上げられてしまう。これは絶対に困るわけです。それが彼らの資金源だったと思います。この武器が、いまも残っているかどうかは知りませんが、カンボジアのココンの付近で、人民党側の押えている港からお金で通して、いろいろな国のゲリラなどに売った、とされています。それも一つだったのでしょうけれども、何と言っても中国からの援助だったのです。

しかし93年の2月ごろか、選挙の前にクメール・ルージュがコンポントムという町で、PKOに参加している中国の工兵部隊を攻撃して、兵士2人を殺してしまいました。このとき私は、中国はそんなに怒らないのではないかなと思ったら、中国は徹底的に怒りました。中国の大使が私に言うには、中国の政府はひとりっ子政策をとっていて、18歳や19歳になった頑強な青年が無益に死んでしまっただけで、政府は遺

族に言い訳ができない、と。

また、中国はあまりにも評判の悪いクメール・ルージュとの距離をあけるチャンスを狙っていたのではないかと思うのですが、それ以来クメール・ルージュに対する援助は、中国は一切やっていない。これは本当だと思います。そして、急速にクメール・ルージュは貧困化していくわけです。中国の人たちは「もうクメール・ルージュはダメだ」ということで、政治的にもサポートしなくなっています。

宝石というか、貴石が唯一採れるのがパイリンというところなんです。パイリンの例では一メートル四方いくらで土地を売るわけです。それをタイの商人が買いに来て掘る。バンコクの市場にあるサファイアとルビーの半分以上が、パイリンのものであると言われています。

それから木材です。タイは国内で切ることができませんので、どんどん切って出している。話によると、クメール・ルージュの押えている北の地域、ダンレック山脈から一度ラオスを経由してタイに入るそうですが、そうやって木材を出しています。ただ木材については、政府軍も同じようなことをやっています。ベトナム経由で出していますから、あまりクメール・ルージュのことを言えません。それはともかく、クメール・ルージュの資金源ということでは、いまでも続いています。

ただ、何と言っても中国の援助がなくなったのが大きい。さらに、かつてスチンダの軍隊のこと行われていたタイからの援助(タイも国際的な問題には敏感ですから)表向きは全然なくなっています。

ですからクメール・ルージュは非常に苦しくなっていると思います。これは非常に言葉が悪いし、私はクメール・ルージュの悪口を言うつもりはないのですが、苦しくなっているので一つの有力な資金源は強盗行為だと思っています。国道を走るトラックを襲うということをやっ

います。それも襲ったものをその場で消費してしまうわけではなく、かなり重要な資金源にしているのではないか、と思われます。

ただ、クメール・ルージュのことにつきましては、まだまだ分からないことが多い。この前も省内で、「お前、クメール・ルージュのことをいろいろ言うけれども、ポル・ポトはいつい

うということで、クメール・ルージュについてはまだまだ外務省にも大使館にも情報のはっきりしないところがあります。

文責・編集部

今川幸雄氏（いまがわ ゆきお）

1932年生まれ。早稲田大学卒。56年外務省入省。アジア局調査官、在タイ公使などを経て、92年3月から1996年1月までカンボジア大使を務める。